

4. 木製品について

今回報告された反町遺跡第1・2次調査では、第2・3・36・48号溝跡から古墳時代・古代・中世の木製品が多数出土した。いずれも河川跡からであるため製品は良好な状態で出土している。器種は多岐にわたる。

古墳時代の製品では、農具（曲柄平鍬・直柄平鍬・鍬未成品・曲柄・多又鋤・竖杵）、容器（槽）、雑具（椅子・案）、木錘・建築材（柱・横架材・垂木・楣）・木樋状製品・杭、古代の製品では農具（鍬）、漁労具（浮子）、工具（刀子の鞘）、容器（漆椀・皿・曲物底板・箱形容器・編組製品）、雑具（締め具）、建築材、杭などがあり、当時の生活を考える資料がまた増えることとなった。

このほか、遺構では打ち込んだ杭に横木をかけた水場遺構が第3・36号溝跡で検出された。

ここでは木製品の各器種を取り上げ、反町遺跡の木製品の特徴を考察したい。

各器種からみる反町遺跡の様相

（1）古墳時代の製品

まず農具、特に鍬・鋤についてだが、鍬では、スリット入りの曲柄平鍬が第36号溝跡から出土しているが、この形態は長野県の遺跡で多く出土する形態であり、長野県からの情報の流れ、交流をうかがわせる。

逆T字状隆起を持つ直柄平鍬が第36号溝跡から出土しているが、県内で木製品が多量に出土する遺跡では必ずと言っていいほど出土する鍬の形である。農具の器種を構成するものの一つだといえる。形態について見てみると、細部については鍬という器種ということもあり多様である。しかし、稜のはっきりした柄穴隆起と、頭部と刃部を分ける隆起は県内での共通する特徴である。

また、鍬の未成品が第48号溝跡から、一木鋤の未成品が第3号溝跡から出土しており、製品の加工など、木製品の生産を行っていたことがうかが

える。遺跡内で加工のどの段階から関わっていたかは現在のところ不明だが、仕上げ直前の未成品を仕上げる作業は行っていたようである。

鍬・鋤の樹種については、アカガシ亜属とコナラ属クヌギ節が併用されている。熊谷市北島遺跡（磯崎・山本2005）・下田町遺跡（赤熊・瀧瀬2006、磯崎・中山2006）・行田市小敷田遺跡（吉田1991）など、これまで県内で報告されている鍬・鋤の樹種選択と比較すると、様相は近似しているといえる。鍬・鋤に関しては、アカガシ亜属を多用する南関東と、コナラ属クヌギ節を多用する北関東の中間的な様相を示している。

槽については、内外面に赤漆を塗布した古墳時代の槽が第48号溝跡から出土した。この時期に赤漆を使用する製品は希少である。

漆を塗布しない槽も第48号溝跡から2点出土している。平面形は方形・円形である。方形で脚が4か所作られる製品は古墳時代前期、関東に一般的に存在する形状である。円形で平底の槽は古墳時代前期の形態より新しい要素だと考えられる。

木樋は、古くは弥生時代前期に出土している木製品である。県内では現在までに出土例がない。関東では群馬県群馬町三ツ寺Ⅰ遺跡（下城1988）で出土しており、館の内部と外部をつなぐ導水施設（水道橋）として使用されている。全国でも、愛知県・奈良県・大阪府・広島県などで10数例確認されているのみである。木樋の使用状況は、掘り込みに木樋を埋めて設置し、灌漑施設、導水施設、祭祀遺構などに用いるのが一般的である。

反町遺跡では第48号溝跡から古墳時代の木樋状製品が出土した。形状としては木樋と考えられるが、固定方法など使用状況や用途は不明である。

建築材である楣は、建物の出入り口上部で、扉や柱などを固定する部材である。第3号溝跡から出土した。図版上で上部の軸穴と方立の軸穴は作り替えられているため、穴は二か所穿たれている。

下部は各一か所ずつ穿たれている。下端の柱穴から軸穴までが11.7cm、柱穴から辺付固定の臍穴までが6.1cmである。この距離は上部の穴2か所のうち内側の穴までの距離と同じである。図版上部の穴が始めに使用されたものであり、再利用のため柱穴・扉の軸穴・辺付の臍穴を下方に作りかえたことは間違いないだろう。

始めに使用されていた軸間の幅は、軸外側同士で79.6cmであり、扉は幅およそ39.8cmの製品を2枚はめていたと考えられる。2回目、廃棄前の軸間は幅72.0cmであり、扉は幅およそ36.0cmの製品を2枚はめていたと考えられる。

(2) 古代の製品

古代の漁業には網漁法と釣漁法があり、浮子は網漁法に用いる漁網を構成する部材のひとつである。漁網は浮子のほか網・錘からなる。第36号溝跡で出土した古代の浮子は、付近から土錘が多数出土しており、網は出土しなかったが一つの漁網であったと考えられる。

浮子と土錘から考えられる漁網は、刺網、投網、曳き網などが考えられる。民俗資料の土錘から魚網の種類を同定する研究が行われており、それを元にすると小形の管状土錘を用いるものは、投網・刺網が考えられ、大形のものは袋網が考えられる。今回出土している土錘の重量は、3.3~13.5gと軽量で、1点のみ83.8gとやや重みがある。土錘の重量から考えると、この漁網は、投網もしくは刺網の可能性が考えられる。

今後報告される木製品

今後報告される反町遺跡第3次調査でも、溝跡から木製品が多数出土している。

主な製品では、農具（鋤・馬鋤）・大形臼・建築材などがある。

古墳時代前期の大型臼は、外面を削り込んで持

ち手を作る形態である。埼玉県内では小形臼の出土はあったが、大形臼は初めての出土である。関東では群馬県高崎市新保田中村前遺跡（下城1994）で出土している。この形態は、弥生時代中期・後期に見られるものであるが、出土状況から廃棄は古墳時代前期である。製品の使用状況を知る貴重な資料である。

建築材も多種出土しており、建築構造を知る材料となると考えられる。

遺構では、遺存状態の非常に良好な堰が検出されており、構造を詳しく知ることができる。

また、反町遺跡の西側に位置する銭塚・城敷遺跡の報告も今後控えており、こちらでは、大形の扉などの建築材や農具の未成品、漆採取の痕跡があるウルシの木などが出土している。

漆を採取した痕跡のある木材は、埼玉県内では吉見町の西吉見条里遺跡で7世紀後半から8世紀前半に属する道路建設の杭3点として出土している。漆を採取したのち、杭として転用したものである。城敷遺跡で出土した漆採取の痕跡がある木はこれに次いで県内二例目である。全国で見ても、漆採取の痕跡がある木は、縄文時代では東京都東村山市下宅部遺跡（戸沢ほか2006）、古代では石川県かほく市指江B遺跡（久田ほか2002）、近世では富山県小矢部市桜町遺跡（久々・塚田2003）で、西吉見条里遺跡の製品と合わせると4例のみである。刃痕が明瞭に見えることから、漆採取の方法を考える貴重な例であり、遺跡内で漆を自給した根拠ともなる。

農具の未成品は今回の報告でもあったが、遺跡内での木製品の生産の様子を知る手がかりになる。

以上のように、反町遺跡および城敷遺跡では、多種多様の資料が報告される予定であり、生産や情報の流通、生活を考察することができるであろう。

（大和田 瞳）